

春風社編集部編 『わたしの学術書—博士論文書籍化をめぐって』

大場, 健司
九州共立大学共通教育センター : 講師

<https://doi.org/10.15017/6790838>

出版情報 : 九大日文. 41, pp.54-57, 2023-03-31. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

◎書評

春風社編集部編『わたしの学術書——博士論文書籍化をめぐって』

大場 健司

本書を書くこと。それはインターネットでダウンロードした論文とは異なり、物質としての重さ、手触りのある書物を書くことである。だからこそ、書物には表紙を触った時の感触や印刷の匂いがある。書店で買った帰りに、電車で揺られながらページをめくる楽しみもあるし、家に帰って書棚に並べ、並んだ本を眺める楽しみもある。作家や批評家、研究者が本を書くことは、そのような読書の楽しみを読者という未だ見ぬ他者へと手渡すことでもあろう。

本書『わたしの学術書——博士論文書籍化をめぐって』（春風社、二〇二三年四月）は、博士論文書籍化をテーマに、春風社で博士論文を書籍化した研究者たち五八名のエッセイを集めたものである。横浜にある学術図書出版社である春風社では、これまでに数多くの学術書が出版されてきた。その「既刊目録」は春風社ホームページ（<http://www.shunpu.com>）で確認できる。例え

ば、文学関連では、大原祐治『戯作者の命脈——坂口安吾の文学精神』（二〇二二年五月）や外山健二『ポール・ボウルズ——越境する空の下で』（二〇二〇年三月）、南富鎮『松本清張の葉脈』（二〇一七年八月）、ソーントン不破直子『戸籍の謎と丸谷才一』（二〇一三年一〇月）などがある。また、哲学関連では北見秀司『サルトルとマルクスⅠ——見えない「他者」の支配の陰で』（二〇一〇年三月）、『サルトルとマルクスⅡ——万人の複数の自律のために』（二〇一二年四月）が、日本のジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-1980）研究でも重要な学術書となっている。そして、その春風社では博士論文の書籍化が積極的に行われており、ホームページ上には、フィンセント・ファン・ゴッホ（Vincent van Gogh, 1853-1890）の絵画『糸杉と星の見える道』（*Sypress bij sterrennacht*, 1890）を背景にした、博士論文募集のポスター「無限の声を——博士論文の書籍化」がアップロードされている。『単著の学術書を出版することを大きな目標とする若手研究者は多くいるだろうが、その大きな選択肢となるのではないだろうか。斯く言う評者（大場）が九州大学に提出した博士論文も春風社で書籍化され、拙著『1960s 失踪するアメリカ——安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（二〇二二年二月）として出版されている。この拙著の出版に関しては、春風社の三浦衛氏と下野歩氏に非常にお世話になり、大変感謝している。そして、この書評で推薦している本書『わたしの学術書』は、大学院生を始めとする若手研究者にとって、「博士論文書籍化」だけでなく、研究者の「ライフ・ヒストリー」(Life history) についても大きな示唆を与える内容となっているだろう。

「博士論文書籍化」という点で言えば、類書には鈴木哲也・高瀬桃子『学術書を書く』（京都大学学術出版会、二〇一五年九月）などがある。このような類書は主に編集者の目線で書かれており、出版の企画や構成、原稿の校正などを考察する上で有益かもしれないが、内容がやや固い印象を受ける。それとは異なり、本書『わたしの学術書』では、研究者のエッセイという形式をとることに、研究生活や人生、研究のモチベーションなど、研究者一人ひとりの「内なる声」（九頁）が届けられていると言つてもよい。

この「内なる声」を考える上で示唆に富むのが、三浦衛氏（春風社代表）による「はじめに」であろう。この「はじめに」では、マックス・ウェーバー（Max Weber, 1864-1920）の『職業としての学問』（*Wissenschaft als Beruf*, 1919）が引用された上で、「研究」は時が進むうちに「時代遅れ」になることはあるかもしれないが、「研究に打ち込んだ情熱」は風化しないことが示されている（一〇頁）。研究者の「内なる声」とは、学術書には明示されていないけれども、確かにそこに存在する。「研究に打ち込んだ情熱」のことだろう。また、ここで重要なのは、矢内原忠雄（一八九三―一九六一年）の『土曜学校講義』第二巻（みすず書房、一九七二年三月）が引用され、知識には移り変わりがあるが、学問や真理に対する態度の重要性が示されていることだ（一一頁）。

周知のように、一九三七年、東京帝国大学教授であった矢内原忠雄は、軍国主義を批判した論文「国家の理想」（『中央公論』一九三七年九月号）を発表したが、これが検閲で全文削除とされ、矢内原は辞職へと追い込まれている。この「矢内原事件」は近

年、日本学術会議の任命拒否問題についての記事などで、「滝川事件」（一九三三年）や「天皇機関説事件」（一九三五年）などの学問に対する弾圧と同様に言及されることが多くなっている。

この「矢内原事件」のち、矢内原は毎週土曜日に自宅で「土曜学校」を開いて講演会を行なっており、東京帝国大学辞職後も「従来 of 学問的仕事の達成」と「真理探求の熱の持続」を欲していた（矢内原忠雄「洗礼を受く」（『アウグスチヌス』告白）講義）講談社、一九九三年九月）三二三頁。このようにいくら弾圧されようとも持続する学問への情熱にこそ、研究者の「内なる声」があるとつてもよい。

本書では、そのような研究者の「内なる声」が、一つひとつのエッセイに「ライフ・ヒストリー」として潜んでいる。そして、その一つひとつが、ゴッホ『糸杉と星の見える道』で描かれた星々のように輝いているだろう。この星々の輝きは、きつと若手研究者の道程を照らす助けになつてくれるはずである。

各エッセイでは、妊娠や出産、就職難など、研究者人生の多くの苦難が語られているが、それと同時に、そのような苦難を乗り越える、研究への情熱もまた語られている。評者の興味関心では、林信蔵氏（福岡大学准教授）の博士論文を二つ書いたというエピソードや、横田祥子氏（滋賀県立大学准教授）の台湾フィールドワークのエピソード、島克也氏（安田女子大学講師）のアニメ『機動戦士ガンダム』（日本サンライズ、一九七九年四月―一九八〇年一月）視聴エピソードなどが興味深かった。

最後に、本書の各エッセイの終わりに「わたしの3冊」コーナーがあることに触れておきたい。このコーナーでは、その著

者にとつて重要な三冊が紹介されているのだが、これも研究の背景を知る良い手がかりとなる。評者であれば、次の三冊を選ぶだろう。

- ① 安部公房『内なる辺境』（中央公論社、一九七二年一月）
- ② 柄谷行人『倫理21』（平凡社、二〇〇〇年二月）
- ③ 三宅芳夫『知識人と社会——J・P・サルトルにおける政治と実存』（岩波書店、二〇〇〇年五月）

本書は五〇二頁もある大著ながらも、定価二〇〇〇円十税と価格も非常に良心的だ。しかもソフトカバーでありながら、書籍の「天」の部分の断裁せずに残す「天アンカット」になっているなど、本の装丁も凝っている。博士論文書籍化を目指す若手研究者や、大学院進学を考えている大学生などには、本書をぜひ手に取ってほしい。

■目次

- 三浦衛（春風社代表）「はじめに」 砂時計のオリフィスとして
- 田中典子「時を経て」(言語学)
- 石川文也「批判的思考への入口」(言語学)
- 水野剛也「研究者人生の「背骨」」(歴史学)
- 渡部森哉「より多くの読者に届けるため」(中南米考古学)
- 小林実「遠い遠いプーシキンへの道」(日本近代文化史)

- 林信蔵「ゾラと荷風とオペラとわたし」(日仏比較文学)
- 岡本亮輔「出版から広がる人の輪」(宗教学)
- 金香淑「自論を見直し磨く訓練」(神話研究)
- 石黒武人「様々な機会への扉」(異文化コミュニケーション学)
- 花本知子「偶然の翼に乗って」(イタリア現代文学)
- 平畑奈美「失われるもの、ひらかれるもの」(日本語教育)
- 山口未花子「教わる、教えるの連鎖のなかで」(文化人類学)
- 吉田早悠里「新たな研究に踏み出すため」(文化人類学)
- 岩崎大「学問を実践につなげる手段として」(哲学)
- 土井清美「なぜ「出かける」のか」(文化人類学)
- 金縄初美「ありのままの姿を描く」(文化人類学)
- 四方田雅史「たびたびの奇縁」(近代日本・アジア経済史)
- 内村琢也「研究の節目として」(日本宗教学)
- 牧野冬生「新しい学問領域を開拓する魅力」(文化人類学)
- 奥田若菜「書くことで現在地を知る」(文化人類学)
- 石垣千秋「学術書が築いてくれる縁」(比較政治)
- 田中英資「時間をかけて向き合う」(社会人類学)
- 那須理香「「縁」に導かれて」(比較文化)
- 宗洋「見る」を考える本は手触りを大事にした」(英文学・映像メディア)
- 村上晶「輓であり翼であり」(宗教社会学)
- 杉田浩崇「弟との対峙」(教育学)
- 住江淳司「敗者を記録する」(歴史学)
- 栗田奈美「それは一つの質問から」(認知言語学)
- 福井崇史「「遅い」は理由にならない」(一九世紀末アメリカ文学)

早川公「プラットフォーム」から次へ」(文化人類学)

橋本憲幸「それは倫理だった」(国際教育開発論・教育哲学)

芳賀理彦「日本」を相対化する」(比較文学)

椿原敦子「つながりを書く、つながらないことを書く」(文化人類学)

人類学)

生澤繁樹「教育の公共性と正義を求めて」(教育哲学)

関根裕子「憧れと錯覚」が生み出すもの」(ウィーン世紀転換

期文学)

寺田詩麻「それは番付の整理から始まった」(演劇学)

阪本公美子「国際的な発信を目指して」(開発学)

茶谷智之「フィールドでの約束」(文化人類学)

坂本薫「付箋への応答」(日本語学)

石田智恵「わずかな、始まりの一步」(文化人類学)

外山健二「学問領域の境界を超える」(アメリカ文学・英語文学)

山田直之「書くことによる人間形成」(教育哲学)

甲斐田きよみ「女性の尊厳を考える」(ジェンダーと開発)

瀬尾悠希子「教える立場の語りを伝える」(日本語教育学)

問芝志保「子どもと一緒に本を生む」(宗教学)

佐藤憲一「そこから何かが始まる」(アメリカ文学)

埋忠美沙「結び、そして繋ぐ」(演劇学)

横田祥子「ともに成長する」(社会人類学)

吉田亞矢「行雲流水の研究歴」(アメリカ文学)

石原美奈子「書籍化への原動力の源は」(文化人類学)

眞城百華「民衆の視点から捉える民族対立」(エチオピア史)

山内由賀「女子教育の行く末を探る」(フランス女子教育史)

中村美帆「書籍というモノになること」(文化政策研究)

長岡慶「タイトルという指標」(医療人類学)

坂口真康「学際的な研究への架け橋」(教育社会学・比較教育学)

小川史「分岐点に戻る」(社会教育史)

佐藤陽祐「そのスケールの大きさ」(現代哲学)

島克也「スリルを味わう」(現代アメリカ文学)

掲載書籍・書誌データ

(二〇二二年四月 春風社 五〇二頁 二〇〇〇円十税)

(九州共立大学共通教育センター講師)